

生活時間が長く、患児の余暇については忘れがちになるが、このような患児こそ種々の欲求を心の中に秘めているに違いない。もっとみんなと一緒に遊びたい。勉強もしたいと……。しかし、ベット上で出来る事は限られています。この調査の結果を参考にし、個々の患児にあった生活圏を作成し、有意義に過せる様に援助していきたいと思います。

## 19. PMD児に電動車椅子を使用して

国立療養所東埼玉病院

大野 美佐子      佐藤 るみ子  
後藤 雪美      河野 久美子  
窪田 冊子

### 〔目的〕

PMD児は障害度進行に伴い、閉鎖的で、内向しがちな傾向を示す。そこで電動車椅子を使用することにより、残存機能維持生活範囲の拡大から、明るく楽しい療養生活ができるよう、調査研究を試み、好結果を得ることができた。

### 〔方法〕

当院での実態調査、全国筋ジス収容20施設における電動車椅子使用の現状調査、。

### 〔結果〕

成長とともに、障害度が進行しているPMD児は、電動車椅子をどのように思っているのか、これまで漠然としか捕えていなかったことを、明確にすることができた。

乗車希望の最大理由「どこでも自由に行ける」ということから、走行距離の測定をしてみて（表4）の通り、実際の行動範囲の拡大を知った。

もう一つの希望理由「疲れない」ということから、主に脈拍とBD測定により、手動電動車椅子別に、身体的影響を比較してみると、脈拍は両方とも、下車後の変動はほとんどないが、BDは両方とも、下車後やや上昇しており、上昇率手動54%、電動40%と、手動の方がやや高い。

次に（図2）の、全国における電動車椅子使用状況によ

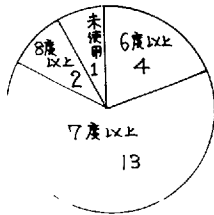
表4

表4 15日間の走行距離 km

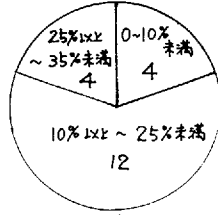
手	A	上肢機能低下により 行動範囲の狭い患児	1.54
動	B	行動範囲の広い患児	3.00
電	C	乗車時間のおよむ等 行動範囲の狭い患児	1.88
動	D	行動範囲の広い患児	51.78

図2

(1) 障害度からの乗車基準 (スイヤード)



(2) 手動車いすに対する 電動車いす使用率



ると、普及率は全国的に大差なく、25%前後の使用施設が多く、充足率はこれよりやや上まわっている。乗車基準は、障害度を基準とし、7度以上が標準的で、他に心負担、IQ生活状況等も考慮されている。

電動車椅子乗車による、患児側の利点欠点は、S49年度兵庫中央病院での発表と、全国調査によっても、ほぼ同じ結果を得た。(表2)

看護的立場において、最大の欠点は管理面で、最低2週に1度は必要なバッテリー液補充、並び清掃が、台数増加につれ、ますます困難になりつつあることから、電動車椅子乗車児の家族へ依頼した。毎日の充電をはじめ、最終管理は職員であるが、身体の代行をしてくれる高価な電動車椅子を通じて、親子の親睦、車椅子への愛着心増強など、よい傾向を示している。他児への看護密度も、以前よりいっそう高めることができた。(表3)

又当院では、変形児の電動車椅子を、オーダー作製することにより、不可能と思われていた患児にも、乗車させることができ、これらの患児の生活は、大幅に改善された。

〔考 察〕

患児自身の重症化の意識と、新しい物への抵抗力から、PMD児の電動車椅子乗車は、初めのうち拒否的であったが、個人負担による台数増加と、交代性による乗車児増加に伴い、乗車希望児も増え、生活状況は明らかに好転している。

表2

表2 電動車いすの患児における利点と欠点

	利 点	欠 点
身 体 面	①行動範囲の拡大 ②疲労度減少 ③容乗感	①上肢機能の低下 ②構作しにくい
精 神 面	①明朗 ②生活意欲の向上 ③言語活動の活発化 ④友人関係の改善 ⑤ストレス解消 ⑥情緒の安定	①障害度進行の自覚の再チェック要ウケ

表3

表3 電動車いすの看護的立場における利点と欠点

利 点	欠 点
①ADLの改善 ②介助の省力化 ③移動時間の短縮	①管理(充電、バッテリー液補充、清掃、etc.) ②他患児・遊具物への見張りが高い ③コストが高い、修理費もかさむ ④重量があるため移動時不便 ⑤故障頻度高く、修理に時間を要す ⑥筋アスロフ・座に適合機材がない ⑦パダック・スパーズの減少化 ⑧付属品が多いため移動時不便

従来では8度児は、ベッド臥床となり、生活空間が狭くなっていたが、電動車椅子の使用で、それらを引き延ばすことができた。

しかし一部の家族が、個人で購入している実状で、まだ大多数のPMD児は、電動車椅子を使用できない。管理上の問題はあがるが、もし手動車椅子と同様、電動車椅子も補装具として、購入できたなら、これまでのPMD児の生活は、確実に改善できると考える。

## 20. PMD児の臥床時における排便姿勢の工夫

国立療養所東埼玉病院

大野 美佐子      上野山 せい子  
河西 信子      生 巢 百合子  
山 本 照 美

### 〔目 的〕

PMD児の中には、障害度の進行と共に脊椎に変形をきたすことにより、身体の位置の安定が図れず、排便時トイレ使用では姿勢が保たれないことと、不安定な体位では排便までに時間もかかり骨折などのおそれがあり危険である。又重症化によるベッド臥床にもかかわらず、排便にはトイレを使用したり、ベッドサイドでポータブル便器を使用している為、病状の安静維持の面からも、ベッド上にて安楽な姿勢で排便ができたらと思いい工夫してみることにした。

### 〔実施方法〕

障害度8度児で脊椎に変形の著明な患児数名を対象として、最初差し込み便器を試みたが、柔軟性がないことから殿部痛などの訴えが多く拒否反応が見られた。そこでゴム便器に切り替え、まず起床時便意の有無にかかわらず臥床のまま、ゴム便器を挿入してみた。しかし腹圧がうまくかからない為と慣れない為とで、長時間かけても排便がなく、あっても残便感がありすっきりしないと不満や拒否反応が現われた。

対策として、対象児に起床時コップ1杯の食塩水を飲用させ、便意を訴えた時にゴム便器を挿入することと、便器の空気調節で各児に合わせ、臥床より起坐位可能な患児には枕や坐布団を使用したり、バックレストや坐椅子ベッドの柵を利用して、体位の安定を図った。又どうしても使いたくないと拒否していた患児には、その必要性を話し時間をかけて説得した。

### 〔結 果〕

最初拒否していた患児でも、理由を説明し、長時間かけての説得で不満ながらも応じてくれた。又食塩水飲用の効果も十分あった為か、月日がたつにつれ排便までの時間も短縮され、ある患児

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔目的〕

PMD 児は障害度進行に伴い、閉鎖的で、内向しがちな傾向を示す。そこで電動車椅子を使用することにより、残存機能維持生活範囲の拡大から、明るく楽しい療養生活ができるよう、調査研究を試み、好結果を得ることができた。